

田邊朔郎博士六十年史

第

一

編

慶應二年(五歳)當時の博士

明治十六年(二十三歳)當時の博士



博士 嚴 堂

田邊勿堂先生

博士 祖 考

田邊石菴先生

博士 萱 堂

ふき子刀自



# 第一章 緒言

人間生存  
の意義如何

蒼々たる大圓蓋のもと、人の生を享くるや、そも何の因、何の果ぞ。坤輿球上、五尺の微軀は宛ら草頭の露にも如かざるに、永遠より永遠へ、刹那も止まらざる時の流れに棹さして、人將た、いかに安住の彼岸に達せむとする。斯くて人間生存の意義は、古往今來、幾多の哲人によりて説かれたるも、遺教空しく存して、其の人竟に尋ぬるに由なく、其の何處より來りて何處に去りしやさへ、邈として盡未來際まで、解き難き大なる謎であらう。

博士の生命と事業

然も、苟も生きて爰に人と爲る。其の生命の意義にして解き得ずんば、自ら進んで之を創めむのみ。徒らに懊惱煩悶して、一生を空費するは大丈夫の屑しとせざるどころ。武人は武に、文人は文に、學者は學に、孰れも各意の欲する點に向つて、刻苦經營、飽くまで其の人それ自身の伏能を啓發し、以つて天賦の生命力を充實擴張せざるを得ない。これやがて人の人たる生存を支持する基準であり、同時に、此の事は人類共存の規範とすべき道であらう。果して然らば、我が田邊朔郎博士が、畢生の努力を我が國土木工學上の大事業に傾倒し、専門的研究に従事して寧日なき所

博士の生  
誕せし時  
代

以、また蓋し止むを得ざるに出づとせねばならぬ。何となれば博士にありては工學的事業の遂行は博士自身が世に生存する唯一の意義であり、同時に、其の工學的研究は、博士自ら自己の生命也と思惟するところのものに外ならないからである。博士の生誕せし文久元年は、西曆千八百六十一年に相當し、歐米諸國にては所謂十九世紀文明の楔子たる科學研究の基礎、漸く確立するに到りし時。されば此の後、黒船の廻航し來るごとに、科學的文明の福音は、宛ら風の響きを傳ふる如く、遠く萬里の波濤を超えて、我が國民の耳朵を打ち、一波一瀾、封建的文化の殘夢を攪破せざんば止まなかつた。況んや維新回天の鴻業を仰いで、朝野一齊に、鎖國的桎梏より解放せらるゝに到つてや、海外の新文物を輸入して、新興帝國の進路を開拓するに日もなほ足らず。従つて、此の時代、我が國に於いて、これが指導者たるべき科學的天才の出現を要望する、眞に渴者の水を求むるよりも急であつた。果然、博士の少年期よりして、其の工業に志せるは、自ら時代の要望に應じたるもの。これよりして博士一生の行程は、我が國文明史の趨向に並進し、殊に其の專攻とするところの方面に於いては、博士は常に時勢に先驅して、前人未踏の境地に魁け、以つて我が工業發展史を指導して、今日の隆盛に達せしめたのである。不知、國家は博士の偉

博士の生  
命と我が  
國文明史  
との關係



博士一生  
の事業の  
國家的價  
値

大なる功業に對し、抑も何を以つて酬いむとする歟。

それ、博士の國家民生の福祉に貢獻せる事業とし、先づ第一に指を屈せらるゝは、琵琶湖疏水の大工事たるや謂ふまでもない。次いで、北海道拓殖鐵道の創設其の後、世界の疑問たりし西伯利鐵道の輸送力と、其の工事實況とに就き萬難を排して、視察調査の任に當つたのである。而して、最高學府に教鞭を執りては、幼稚なる當年の學界に多數の人材を供給し、又自ら研究に従うて夥しき専門學的業績を擧げ、加之幾多の創見を實地に施して斯學の進歩發達に資せる等、其の功業は人をして殆んど枚擧に暇あらざるを思はしむ。

琵琶湖疏  
水工事の  
眞價

琵琶湖疏水工事は、長くも明治天皇陛下が産業振興の聖旨を拜戴し、博士が身命を賭し、明治十四年、歳二十一にして調査に着手し、明治二十三年即ち博士三十歳を以つて完成せし大事業であつて、夙に世界工業史上有數の記録を印し、殊に工事中、博士の設計せる水力電氣事業の如きは、當時歐洲先進國に於いても、未だ試みられざりし偉大なる新施設に屬する。故に此の大工事は、單に所謂水利を藉りて人工を資け、以つて我が國工業上の發展を促進せる實益の方面に甚大の價值あるばかりでなく、又學術上に於いて後世に傳ふべき専門學的業績たるのみならず、實に我が

外人を驚  
歎せしめ

たる博士  
の業績

日本人の科學的能力を、世界列強の前に示し得て、先進國民をして驚歎措く能はざらしめ引いては、我が帝國の實力の斷じて世界列強に相讓らざるを想はしめたる偉大なる權威を有するのである。其の一例を左に掲げるであらう。

露人善く  
疏水事業  
より推し  
て我が國  
の實力の  
侮るべか  
らざるを  
識る

それは明治三十五年、即ち日露戦争前一年有餘のことである。人も知る如く當時、日露兩國の風雲は頓に險惡となり、彼が傍若無人なる極東政策に對し、我の自制を專とせるがため、僅かに爭端を發しなかつたのであるが、事態斯くの如きを以つて其の前後、我が國の實力を調査せむために、露人の來朝する者踵を接するに到つた。而して彼等はいづれも視察の結果、口を揃へていふ。日本甚だ與し易しと。若し日本の文明より歐羅巴の輸出に係る物資と知識とを控除すれば、何物の存するあるか。此の一事を觀るも、日本を敗るは、所謂朝飯前のことのみと。露國參謀官アダバンシ氏また此の年來朝し、琵琶湖疏水路を舟行して、京都に來り、十月七日、京都帝國大學に於いて木下總長並びに大森京都府知事と會見した。其の時氏は語つて曰く。

現今、我が國人の中で、日本甚だ與し易しと論ずる人が多いが、實際に熟く觀察するに、其の意見は大きな誤である。先づ此の疏水工事を見給へ、千八百九十年に完成したものであるのに、

博士の事  
業に對す  
る外國識  
者の注目  
と稱贊

水力電氣を計畫して居る。實にこは世界中に魁けたる大事業である。而して、此の事業は日本人の手で完成したものである。歐米輸入品を除く、日本は零であると思ふのは大きな間違である。日本人には相當創業の力がある。此の疏水事業などは、これを視察する外國人に、日本人の手に成つたさといふことを知らせたいものである。

と。彼が參謀官として、流石に一隻眼を有して居たことは、後、兩國交戦の結果に見て明かである。即ち日本戦勝の原因が、嘗に其の武勇のみにあらずして、科學的創造力の優秀に存せしものなる事を知る者にあらずんば到底我が博士の功業の眞價値を會得し得ないであらう。

これよりさき、明治二十一年(西曆千八百八十八年)五月二日、既にメール紙は疏水工事の概要を報道し、次いで此の大工事は争つて英米の各新聞雜誌に紹介せられ、又疏水運河の寫眞は、獨逸巴華里王國(ベルギー)王國(ベルギー)の學術實業名工博物館に出陳せむことを望まれ、なほ米國聖路易世界博覽會(セントルイス)よりは銀牌を、英國よりは學術的功績を表彰する爲に、稀に授與するテルホルド、メダルを、博士に各贈與し、明治二十九年四月十五日英國海軍大臣スペンサー氏は、東京工科大学を觀覽し、博士に向つて、前日京都に於いて疏水工事を見たが、これを竣成せるは右手のない人で、然も水力電

氣事業に見事なる成功を示した。當時は若年であつて、此の大學の卒業生なりと  
きく、君は其の人を知るか」と問ひ、博士は莞爾として右掌を見せ、手でなくて指です  
と應へたるに、氏は其の奇遇を悦びて、握手を求めたる如き、ひとりこれらは博士の  
爲に快心事たるのみでなく、實に日本文明の爲に萬丈の氣を吐けるものに外なら  
ない。

偉大なる  
此の功績  
に對し國  
家は如何  
に酬いた  
るか

然も記せよ。斯かる偉大なる功業に對して我が國家の博士に酬いたるところは  
何物もないのである。攻城野戰の將軍には、譎詐縱橫の政治家には、營利本位の實  
業家には、機に應じて國家の榮爵を奏請して憚らざる日本政府は、博士の存在を忘  
れたるものゝ如く、僅かに疏水工事落成の際、監督官廳たる京都府よりは其の賞與  
として月給一ヶ月分を、京都市よりは金時計一個に感謝狀一枚を、博士に贈りしに  
過ぎぬ。あゝ當年海外に於いて比類稀なる水力電氣を施設せる、世界最長の運河  
インクライン竣工を表彰するに、國家は斯くの如き待遇を以つて足れりと爲すべ  
きであらうか。

英國に於  
ける國家  
的事業の  
表彰は如  
何

試みに斯かる事業を歐米に於いて完成したる者ありとせよ。其の人は如何の優  
遇を國家より受くべきぞ。彼の英國にてはフォース、ブリツヂを架設せるときは、

擔當技術者はいふまでもなく、其の請負人にまでもナイトを授與して居るのである。文化的事業に對して國家がこれを重要視し之を尊敬すること斯くの如くにして、始めて一國の文化は隆々として興起せらるべく、學者の權威また是に於いてか、一世の瞻仰するところとなるを得るであらう。博士や、軍閥の國、政治家の國、實業家の國、否、攻城野戰の國、譎詐百出の國、營利本位の國に生れて、一身を挺し、死生を賭して文化事業の發達に殉じたる、抑も何の意ぞや。あゝ觀來れば、博士の六十年史は眞に軍閥政商の跋扈に虐げられたる犠牲者の哀史といふも何の不倫であらうぞ。博士が斯界の第一人として業餘書畫を善くし、篆刻に長じ又音曲に通じて、之くどころ可ならざるなきを見以つて博士の多藝多能を稱し又は其の風流を念ふ如きは、博士が滿肚奔騷の氣を知らざるの甚しきものではないか。

博士の六十年史は犠牲者の哀史か否か

否。否。言ふを止めよ。宇宙の生命の悠遠なるを知り、眞理の探究を不斷の任務とせる學者の生命の、やがて宇宙のそれに融合して、永久に人類を支配する所以の道を知るもの、區々たる人爵また何かあらむ。古人曰く不患人之不己知、患其不能也と。又曰く不怨天、不尤人、下學而上達、知我者其天乎と。博士の本領儼として是に存す。偉大なる博士の六十年史は、實に博士が天の我を知るを樂しむと共に己

れの下能を患ひ、以つて下學して上達せる、醇眞の學徒が向上の典型を示すもの。編者は度んで有らゆる雜想を腦裡より拂拭し、博士が寛々たる高人の風格を想望しつゝ、徐ろに叙述の筆を運ぶであらう。編者の秃筆、果してよく其の幾分、にても髣髴し得るであらうか。即ち紙に臨んで、扭捏たるもの無く、んば非らずである。

(1) アダバシ參謀官は、此の日田邊博士に會見を希望して居たこの事であつたが、當時の話として、是きりであつたのである。併し其の後、一年有餘で日露開戦となつた。アダバシ氏の見込は間違でなかつた、我が日本人の忠勇と、其の海陸輸送の力、戰鬪機械の製作力、船艦の運行、其の他諸の仕事とが學術的であつたのが、日本の勝を制した原因であること云ふことが、次第に分明になつて來て、此の談片が端緒となつて明治三十八年七月に、京都市參事會で決議をなし、SAKURO TANABE DR. ENG., ENGINEER IN CHIEF, WORKS COMMENCED AUG. 1885, COMPLETED APRIL 1890. その文を疏水隧道の入口と、京都の出口との拱冠上に、外國文字で彫刻することとなつた次第である。